

近世バルト海世界における大国像への迫り方～ロシア旅行記における大国ロシアの不在～

古谷 大輔（大阪大学）

1. はじめに

2009年は大北方戦争におけるポルタヴァ会戦から300周年にあたる。一般的に、ロシアがスウェーデンに対して軍事的勝利を取めたポルタヴァ会戦は、スウェーデンの衰退とロシアの勃興というバルト海世界における地域大国転換の転機になったと理解されている。ここで地域大国の基準を特定の地域世界における軍事的プレゼンスの優位として理解するならば、確かにポルタヴァ会戦はバルト海世界における軍事的覇権の移行の契機だったと言える。

しかしながら、こうした文脈で用いられる地域大国は軍事的プレゼンスの優位に限って議論されるべきものだろうか。従来の近世ロシア国制に関する研究史では、ロシアの軍事的覇権確立の根幹に近世スウェーデンで実現された軍隊経営や官僚制度など政治技法の摂取があったことが明らかにされている。もしここで地域大国の基準を、隣接諸国家に対するなにがしかの政治技法や文化規範を提供した国家とするならば、人的・物的資源は貧しくともスウェーデンが近世バルト海世界における大国であったとも解釈できよう。近世スウェーデンはロシアに限らず、プロイセンやデンマークなど隣接諸国家に集約的な国家経営の技法を提供した国家であったからである。

ここで地域大国の何たるかを議論する際に、我々はその基準の設定方法に問題が隠蔽されていることに留意せねばならない。つまり我々は、当該時代の歴史の趨勢が明らかとなった後世の立場に立って、地域大国の基準を設定して特定の国家の歴史的位置を解釈しようとする傾向があるということである。軍事的プレゼンスの優位にしる、政治技法や文化規範の模範にしる、我々がロシアやスウェーデンを地域大国として見なす基準が歴史の実態をどれほど反映しているものかどうかという問題、換言するならば同時代のバルト海世界に生きた者にとってそれらの基準が共有されていたかどうかという問題については、今一度同時代に生きた者の残した史料に沈潜し、その証言に耳を傾けるべきであろう。

本報告は以上のような問題関心に立ち、バルト海世界における軍事的覇権がロシアへ移行したとされている大北方戦争終結以降からナポレオン戦争期にかけての大国ロシア像の実態を分析する前提として、同時代のロシアに滞在したスウェーデン出身者によるロシア体験の叙述の特徴を析出することを目的としている。

2. 大北方戦争以降のスウェーデン出身者による旅行記／滞在記

本報告がロシアへの旅行者の記録に着目してロシア・イメージの検討を進めようとする理由は、近年ヨーロッパの歴史学界において啓蒙期に公にされた旅行記録の再検討作業を通じて、同時代に現れた新たな世界観把握の方法を分析する研究が進められており、それらの研究の知見を近世スウェーデン史に適用するならば、啓蒙期以降の旅行記に表現された空間認識は、北の方位感覚に裏付けられたスウェーデンに独特な世界観構築の一つの方法と考えられるためでもある。そこで、本報告の議論をより明確にするために、ここで18世紀における旅行記録について概観しておこう。

18世紀は、大北方戦争の敗北によって軍事的覇権が失われたスウェーデンにおいて、バルト海帝国と通称される広域支配圏に代わる秩序の再編が求められた時代だった。政治的・経済的な再編は王国議会を中心とした国制再編や議会を中心とした重商主義政策の推

進などに見られたが、同時にこの時期にはスウェーデン的秩序の理念的な再編も進んだ。それは、18世紀以前より形成されつつあった北という方位感覚で裏付けられた独特な世界観構築の継続であったとも言えよう。

近世スウェーデンに生きた知識人は、16世紀以降大陸ヨーロッパから伝わった人文主義的学知の技法に従って、一方では古代以来の歴史的系譜を歴史書で著しながら、他方ではスカンディナヴィアという自然環境の特殊性を地理書で著した。リュードベックによって体系化されたゴート主義に見られるように、近世スウェーデンにおける世界把握の方法の特徴は、時間軸と空間軸によって設定された座標のうえで自らの歴史と地理の特殊性を位置づける点にあった。こうした世界観把握の方法は大北方戦争によって断絶したわけではない。例えば、ラップランドへの探検事業を通じてスカンディナヴィアにおける自然環境の独自性を明らかにしようとする態度は、リュードベックの息子を通じて生物分類の祖として知られるリネーへと引き継がれた。さらにアメリカから日本へと及ぶ世界に派遣されたリネーの弟子たちによる探検事業の事績は、スカンディナヴィアとは異なる世界の事例を集積することで、逆に北の世界の独自性をあぶり出す結果をもたらした。

このように本報告が対象とする大北方戦争以降の時代は、独特な空間把握に基づく新たな世界観の構築が図られた時代だったと言えるが、そうした世界観を普及するに活用された旅行記が執筆者の意図を完全に反映して世に普及したかどうかという点については、同時代の出版事情に関する観点から一定の留保が必要である。確かに、啓蒙期ヨーロッパにおいて旅行記は最も読まれた書籍ジャンルとして知られており、スカンディナヴィア出身者による旅行記も数多く刊行されるようになった。リネーによるラップランドやスコネ、ダーラナの探検記をはじめ、彼の弟子にあたるカルムの北米探検記、チューンバリによる日本滞在記、イギリスのJ.クックとともに南洋を航海したソランデルによる航海記など、博物学的関心に基づいて世界を探索した者による旅行記が数多く出版された。またその一方でホルベア、バッゲセン、フランセーン、エーレンスレーヤー、イェイユエルといったスカンディナヴィア文学史に名を残す者たちが、スカンディナヴィアから大陸ヨーロッパへと旅をした際の印象を記録した旅行記も公刊された。アジア・アメリカなどへの探検事業や大陸ヨーロッパへのグランド・ツアーを踏まえた旅行記の存在は、読者が異文明に対する博物学的関心をもつにせよ、あるいは大陸のヨーロッパ文明に対する憧憬を抱くにせよ、異者との接触を通じた新たな自己認識の陶冶に重大な契機を与えたことは事実だろう。

しかし、そうした啓蒙期における旅行記の隆盛は、18世紀半ば以降の出版市場の勃興を背景としていたことを忘れてはならない。スウェーデンでは1766年の出版自由法の制定の前後に書籍の印刷・販売を担う出版業者が登場し、国内に流通する書籍数は飛躍的に増加した。例えばサルヴィウスはこの時期のスウェーデンを代表する出版業者であったが、彼が経営した出版社はスウェーデン科学アカデミーの定期刊行物を発行するだけでなく、自ら交流をもったリネーや経済学者シュデーニウスなど、啓蒙期スウェーデンを代表する知識人に著書の執筆を依頼し、彼らの記述を編集して刊行した。すでに啓蒙期のスウェーデンにあって、著名な知識人による業績は、書籍の編集・印刷・販売を一手に引き受ける出版業者の手を通じて、出版市場に商品価値を有する出版物として普及させられていたのである。

そうした知識人による旅行記は、読者が執筆者の記述を通じて異文化を追体験できるという点に商品価値が見出され、出版業者によって編集・販売された経緯をもつ以上、その内容が執筆者本人の意図をどれだけ反映していたものかについては、今後より慎重な検証作業が必要となろう。それに対して、本報告が紹介する史料は、商品化を前提とせず記

録されたロシア滞在者の記録である。それらを選択した理由は、スウェーデン出身者によるロシア・イメージは、商品としての価値を念頭に置いて出版業者の意図が介在させられた旅行記以上により直接的に記録されていると判断したためである。

3. ロシア滞在の記録に見られる親近感の描出

さて、本報告で紹介するロシア滞在記は、おおよそ以下の二つに分類できる。一つは、平時にあって外交業務や自らの事業を目的として自発的にロシアを訪問している人々による記録である。これら自発的ロシア滞在者の多くは、彼らの関心ある分野に関して情報を得る過程で彼らが体験した日常の記録を残している。これに対して、もう一つのロシア滞在記は、18世紀から19世紀初頭にかけてスウェーデンとロシアの間で勃発した戦争の結果、戦時捕虜などの形で強制的にロシアに滞在することを求められた人々によって残された記録である。戦時にロシアこれらの人々にとって、旅の目的や最終的な目的地などは明確には設定されないまま、彼らが投げ込まれた状況のなかでサンクト・ペテルスブルグやモスクワといった都市から遠く離れた地でロシアでの彼らの時間を過ごしている。

まず平時における自発的なロシア渡航者の一例として、スウェーデンの王国修史官を務めたブロックマンの記録を紹介しよう。1754年7月にブロックマンはデンマーク出身の歴史家ランゲベックと共にロシアにおける公文書管理の調査を目的としてサンクト・ペテルスブルグを訪れた。1754年7月29日の夕方彼らがロシアの首都に到着したときの経験を以下のように記録している。

【史料1】…我々は、宿の女将がデンマーク人だったことから、我々の状況は恵まれていると思った。我々には食事を共にする栄養に浴したデンマーク使節モルツァン伯は、同じ通りに住んでいた。…我々はペテルスブルクに住んでいるマグヌセンという名前の商人に会った。彼は常に礼儀正しく、信頼できる男性であった。… (Brockman, *En resa genom östersjöprovinserna*, s. 93.)

ブロックマンによるこの記述から、サンクト・ペテルスブルグが多国籍都市だったことがわかるが、それ以上にブロックマンらは、彼らの身近に親近感を覚える者が存在したことにより、異国の地にならぬ安心感を得ていたことを読みとれる。サンクト・ペテルスブルクにもとより生活していた宿泊施設の女将、デンマーク使節、デンマーク人商人など、親近感を覚える者の存在は滞在経験が肯定的に記述する背景的要因を準備している。ブロックマンは彼の記録のなかで再三再四そうした親近感を与える対象について触れている。例えば、次に紹介する引用は、サンクト・ペテルスブルクにおける同じスウェーデン出身者に関する記述である。

【史料2】ペテルスブルクの通りは、至る所でストックホルムに広がる通りよりわずかに大きい。ミリオン街と冬宮の間にはピョートル1世の像が立つ大きな広場があり、その近くにスウェーデン使節ポッセ男爵が住んでいた。彼をはじめ法務秘書官ヤンケ、私設秘書官エークマンは私にたいそう親切にしてくれ、私は三、四回、彼ら使節団とともにその場所で食事をした。(Brockman, *En resa genom östersjöprovinserna*, s. 94.)

ブロックマンがこの引用で記録しているポッセ、ヤンケ、エークマンといった人物とどのようにして接触をとったかについての説明はない。しかし、当時の旅行者の慣行に

従うならば、旅行の準備段階でロシアにいる同郷の居住者をあらかじめ調査し、現地での滞在と調査を円滑に進めるべくとりわけ外交業務の従事者と接触していたということは想像に難くない。この場合、例えば、大使館と領事館などでの外交業務で際だった位置をもつ人物がロシアへの一時的な訪問者にとって窓口となり、彼らを通じて訪問先の都市社会に触れ、ロシアとそこに住む人々に関する役に立つ情報に接近することができたと理解できる。そして、こうした外交業務上の人物たちもまた、異国に赴いた一時的滞在者に親近感を与える機能を果たしていたと言えよう。ブロックマンの記録には、そうした親近感を与える機能を果たした同じスカンディナヴィア出身者との日常的な接触の記録が多く、ロシア滞在記とはいえ、彼が記録する対象はロシア人ではなく、彼がともに時間を過ごしたスウェーデン人とデンマーク人だったとも解釈できる程である。

次に、戦時下にもありながらも外交業務を目的としてロシアに渡航したブランデルの記録を紹介しよう。彼はナポレオン戦争の時期にロシア皇帝アレクサンドル1世の下へ派遣されたスウェーデン使節ルーヴェンイエルク伯に秘書官として随行した人物である。ルーヴェンイエルク伯を代表とするスウェーデン使節団は、ロシア皇帝の親征に従って戦地となったロシア、ドイツ、フランスとロシア皇帝と行動を共にした。1802年～25年にかけて残されたブランデルの記録は、先に紹介したブロックマンのように渡航の目的地が定まっていたわけではないが、ロシア皇帝とスウェーデン政府の外交窓口としての業務内容が定まっていた者によって記録されたものであり、いわば自発的渡航者の記録として分類しうるものであろう。

【史料3】…ロシアの宰相主宰の夕食会の日を除けば、この邸宅には毎朝ラセイ退役将軍も訪ねてきた。彼は80歳になろうかという人物で、ヴェリキルキの近所で隠遁生活を送っている。彼はイングランド生まれで、彼の母国語を聞くといつも喜んでいる。さらにはビリニウスからの亡命者であるセミストロフスキ伯爵や、太ったポーランド貴族、ロシア貴族たちも集まってきた。… (Brandel, *Dagbok* 1802-1825, s.1)

この引用では、出身地域ではなく、階級や位階といった社会関係に従って親近感を共有する集団が築かれていたことが示されている。彼の叙述からは、先に紹介したブロックマンの記録に記載されていた同郷者の存在のほかにも、自主的滞在者が渡航した先では、社会的・職業的属性を同じくするという条件が滞在者に親近感を与える機能を果たしていたことが理解できる。しかし、そうした環境下にあっても、ブランデルが親近感を得られない状況に直面していることを気づかされる記述も見受けられる。

【史料4】…午前中自宅に待機した後、私は午後2時にボルシュ伯爵夫人のもとに赴いた。夫人は私を夕食に招待した。…そこには、彼女の家族以外にもチェレパノフ連隊長、ヴィテフスクの副知事、2、3のロシアの紳士たちも招かれていた。…連隊長以外、残りの客はポーランド語とロシア語だけで話をしたので、夕食はあまり楽しくなかった。さらにそこでの会話は私が全く知らない個人と特定の事柄に集中していた。… (Brandel, *Dagbok* 1802-1825, Augusti 5, 1812.)

史料3と比較するならば、この箇所では彼が理解できない言語の使用と彼が預かり知らない会話の内容によって、社会的属性を共有する者の間でも親近感が喪失されている状況を理解できる。こうした親近感を感じさせる機能が失われた状況については、ブランデルの

ような自発的滞在者による記録以上に、戦時下にあつて強制的にロシアへの滞在を求められた者の記録のなかでより明らかとされている。そうした例として、次にハウスヴォルフ女史によるロシア滞在記からの引用を紹介しよう。ナポレオン戦争時にヘルシングフォッシュ（現ヘルシンキ）に居住していた彼女と彼女の家族は、1809年ロシア海軍によるスヴェーアボリ（現スオメンリンナ）要塞陥落の後、捕虜となり、ヘルシングフォッシュからノブゴロドへの移動を強制された。彼女の記録には、捕虜としてのロシア滞在時の経験が描かれている。

【史料 5】…父は女中と召使いを呼びつけ…彼らが旅をともにして運命を共有する気があるか訪ねた。彼らは「はい。」と答えた。旅行を共にする一行のなかでイヤネ夫人と私だけが女性であった。私たちにとっての喜びは、その集団のなかにいた多くの紳士たちが、しばしば私たちを励ましてくれたことだ。… (Hausswolff, *En svensk flickas dagbok*, s. 88.)

この引用のなかで特徴的な点は、本来同性である女中たちの存在が、ハウスヴォルフたち滞在者の一群から消え失せてしまっていることである。この点について、近年、18世紀スウェーデンに來訪したイギリス人による滞在記の研究を進めたデーヴィスは、旅行者の一群における女中・執事と雇用者との間にある階層的排他性を議論しているが、彼の議論を参考にするならば、女中たちの存在の消失は、ハウスヴォルフ女史によって女中たちの社会的属性が共有されておらず、旅行者の集団から排除されているためだと解釈できる。またそうした記録からは、俘囚となり強制的な移動に参加させられている1人の女性として彼女の唯一性を主張するための方法とも解釈できよう。もし社会的身分の相容れない下層の女性も同じ集団に含まれるならば、俘囚としての彼女の英雄的な唯一性は崩れてしまうのである。先に紹介したブロックマンやブランデルの記述では、旅行者の集団にも、その滞在先にも、親近感を得る機能をもった存在が確認できた点でハウスヴォルフのロシア経験とは異なる。強制的なロシア連行を経験したハウスヴォルフの記述では、自身の唯一性とロシア滞在の冒険的側面を強調するために、親近感を与える存在は同じ社会的属性を共有する異性にのみ求められ、同性であってもそれを共にしない者は排除されていた。

4. 親近感の有無によるロシア体験の記述の相違

これまでのところで、本報告では自発的・強制的の双方におけるロシア滞在者の記録に見られる記述から、異国の地にあつて親近感を感じさせる存在の有無が描写されている点を確認した。それでは、そうした親近感を感じさせる者の存在によって彼らのロシア体験の記述はどのように影響されたのだろうか。

次に紹介する従軍牧師ヴィーンバリは、スウェーデン王グスタヴ3世が開始した対ロシア戦争中の1790年にロシア軍の捕虜となった人物である。彼は1790年7月3日にヴィーボリ（現ヴィーボルク）から出帆したガレー船に乗船していたが、その船は座礁し船員ともどもロシア軍によって捕縛された。2ヶ月間の監禁の後、ヴィーンバリとガレー船の船員たちは、レヴァル（現タリン）からノブゴロド、さらにはヤーロスラフまで移動することを強制された。ヴィーンバリは多くの同胞とともにあつたが監視は特に厳しくなく、彼らは訪問した先々の町で自由に動き回ることができた。牧師であつたヴィーンバリはそこでロシア正教会の礼拝にも出席し、ロシア人の宗教儀式と信仰形態の印象を記述しているが、彼の記述からはスウェーデン人から見たロシアの宗教事情に対する違和感を確認できる。

【史料 6】…ロシア人は水の中に入って洗礼を施す。この方法によって洗礼を施されない人々はキリスト教徒ではないとロシアでは主張されている。彼らは、人の使った洗われていない器やスプーンで飲んだり、食べたりしようとはしなかった。彼らのなかには（注…彼らの言う洗礼を受けていない）スウェーデン人が使ったスプーンを火の中に放り込むものもいた。…(Winberg, *Dag-bok*, s. 86-87.)

ヴィーンバリがここで記録している対象は、キリスト教信仰の唯一真正な形態と主張するロシア正教会の姿である。彼によって記録されたロシア正教会の独善的なイメージはそれ以前のスウェーデン出身者による滞在者によっても記録されたイメージと類似しているという点で、こうした滞在記もまたそれ以前に書かれたロシア文化の違和感を記述した他の滞在記を引き継いでいる。ここでヴィーンバリの記録が戦時における強制的なロシア移住という環境において残されたものであったことを考慮に入れるならば、ロシア人とスウェーデン人の不一致を記述した背景には、旅行者が滞在した環境において親近感を覚える者を失われていたことが一つの要因として考慮されねばなるまい。ヴィーンバリの場合には、先に紹介したブロックマンやブランデルのように移動した先々の町や村で、同郷人や社会的属性を共にした者を媒介とした現地体験をしていない。従って、このような親近感を得る機能が失われた先でのロシア体験に遭遇した際には、スウェーデンとロシアとの文化的対立がより明瞭に記述されていると解釈できよう。

【史料 7】…ロシアの聖職者の一人が、8月26日に私を訪ねてきた。朝であったが、彼はすでに酔っぱらっていた。まるでロシアの聖職者は飲酒を神に宣誓した人物のように私には見えた。聖職者はラテン語を話した。奇妙で滑稽だった。私は、数日後に再び彼を訪ねた…。その聖職者の妻と一緒にいる中で、コメディが起きた。彼女は、私が聖母マリアと十字架の前で十字をきってお辞儀をすることを望んだ。彼女は私の指を保つ方法を私に教えて、十字を作ってお辞儀をし、私に同じようにするよう頼んだ。私は聖職者に「これはスウェーデンでの習慣ではない。」と囁く一方、彼女の話してくれたこと、してくれたことには気がつかないふりをした。その聖職者は私に何かを見せてくれようと私の手をとった。それでも彼の妻はあとに続いて私の腕をつかんで十字をきらせようとした。彼は数回彼女を部屋の隅へと連れていったが、その度ごとに彼女は戻ってきた。…(Winberg, *Dag-bok*, s. 87.)

この引用にあるロシアの聖職者の描写でも、酒に対する聖職者の意思の弱さなど、ロシアの聖職者に対するステレオタイプ化されたとなったイメージの援用が認められる。ヴィーンバリが記録したこの時の経験を「コメディ」と表現するとき、彼も人口に膾炙していたロシア聖職者に対する滑稽なイメージを無意識のうちに参照していたと言えるだろう。しかし、ここで記述の対象となった出来事が起きた状況は、いささか特殊でもある。ここでは旅行記の記述者であるヴィーンバリは主体的にこの状況に関わっているのではなく、この情景の主体はむしろロシア正教の宗教的实践を求めた聖職者の妻であった。つまり他者の側がヴィーンバリに対して関心をもったことにより、滞在記の筆者が他者による関心の対象に位置する主客逆転の現象が起きているのである。

こうした主客の逆転は、非自発的にロシアへの移動を強制させられ、他者の好奇の目に晒された者による滞在記のなかでしばしば見受けられる特徴である。最後に紹介するエーシュトルムの滞在記もそうした事例の一つと言える。しかしエーシュトルムの場合には、

他者の関心の対象に一時的滞在者が転じたことによって、同郷者でもなく、社会的属性の共有者でもない者との親近感が生まれたことが確認できる点で、先のヴィーンバリの事例とは異なる記述である。

エーシュトルムは、ナポレオン戦争期にトゥルク・アカデミーからロシア語を学ぶためにモスクワへ留学していた人物である。しかし1812年のナポレオン率いるフランス軍によるロシア侵攻を受けて、彼の計画は変更を余儀なくされ、彼は他の留学生とともにニジニ・ノブゴロドへ向かう避難民となった。エーシュトルムの周囲にはトゥルク（現オーボ）以来の知人たちがいたことは事実であるが、彼の逃避行の記録からは、一時的滞在者が他者の関心の対象となることで、異国の者に対しても親近感を獲得するという一面を確認できる。ここでそうした事例として、エーシュトルムがニジニ・ノブゴロドに滞在したとき、彼がヤゴジンスキーという市民と知り合いになった際の記述を紹介しよう。

【史料8】…私は、最上の礼節をもってもてなされた。私は夕方8時まで彼の家に滞在したが、それは私にとって大きな試験のような経験だった。彼らは私の服について尋ね、私がトゥルクで作られたものだと彼らに話すと、彼らはまじまじと私の服を観察し、同じような服がスウェーデンとフィンランドだけでなく、ロシアでも作られていたという事実を驚いていた。私が帰ろうとすると、彼らは私に翌日の晩に再び訪問するよう尋ねてきたので、私は翌日も彼の家を訪ねた。親愛なる友よ、あなたなら理解できよう、彼こそが私にとって、本当の意味でのロシアにおける最初の知人となったことを！（注…同じくトゥルク・アカデミーから留学していた）オッテリンはどうだったか？とあなたは訪ねるだろう。オッテリンは残念ながら訪問できなかった。彼は悪寒に苛まれていたからである。…

(Ehrström, *Moskva brinner*, s. 129-130.)

この引用は、エーシュトルムがヤゴンスキと知り合ったその日の夕方にヤゴンスキ家に招かれた際の記述である。この記述のなかで、エーシュトルムがヤゴンスキら本来親近感を得ることのない者たちの関心の対象に自らがいることに意識したことが描かれている。その場にはトゥルク以来の彼の親しい友人がいなかったことも明らかにされ、エーシュトルムが同郷人の存在しない状況にあって、いかにして新しくロシアの知人を作ったかについて言及されている。同郷の者も、社会的属性を共有する者も存在していなかったという事実にもかかわらず、この場合にはロシア人との対立ではなく、エーシュトルム自身がロシアの家族の好奇心の対象となり、エーシュトルム自身が他者による話題の中心にいることを自覚することで友好的接触が果たされた一事例と言えよう。

5. おわりに

我々が異国の地を旅するとき、見知らぬ環境のなかで自らが親近感を覚える存在から遠く離れ、自らとは異なるものと対峙し、そこに他者の存在を自覚する過程があるように見える。しかし実際には、異国の地にあっても親近感を得る方法は意識的・無意識的を問わず様々に存在している。本報告が紹介したように、スウェーデン出身者のロシア滞在記において頻繁に記述されている同郷者や社会的属性を共有する者の存在は、見知らぬ土地に滞在する者の経験に保証を与え、滞在記のなかにおけるロシア叙述に肯定的性格を付与する鍵となっていると言えよう。そうした親近感を得る存在の有無は、彼らのロシア体験にも影響を与えていた。戦時においてロシアへの強制的滞在を強いられ親近感を得る手段が見つからず、ロシアへの接触方法を欠いた場合には、ロシアは完全なる他者として認識さ

れる可能性が高い。そのように考えるならば、我々がこうした滞在記録を史料として用いながらロシア像の再検討を行う場合には、一時的滞在者を取り巻く親近感の対象が取り除かれた場合にのみ、はじめてロシアの姿を明らかにすることができると言えよう。しかしそのような場合でも、親近感を得る存在のない環境に滞在者が置かれながらも、スウェーデン出身者が他者の関心の対象に転じたとき、他者は他者でなくなり、むしろ親近感を付与する者へ変貌する可能性もあることに我々は注意を払わねばならない。

18世紀から19世紀初頭の時期に記録されたロシア滞在記には、以上に整理したような親近感の対象が記述される特性が見受けられる。それゆえ、それら親近感に触れたスウェーデン出身者のロシア体験からは、今日の我々が当然視するような大国ロシア像は浮かび上がってこない。本報告の論題を「大国ロシア像の不在」とした理由はそこにある。本報告が紹介した滞在記録はいまだ少数に限られているが、今後より多くの史料分析が進められることで大北方戦争以降のバルト海世界に生きた人々の意識のなかに大国ロシア像が不在であることが明らかにされたとするならば、我々には再検討を要するより大きな歴史的問題が突きつけられたことになる。すなわち、第一にバルト海世界の主権国家体制のなかにあって我々が意識するような大国ロシア像はいつから構築されるようになったのかという問題、第二にバルト海世界の近世的文脈において大国とされる基準はどこに見いだせるのかという問題である。それら将来的に検討されるべき課題を発見したことを成果として、本報告を閉じることとする。

【参考文献】

1. Berch, C.R., "Reseameckningar om Ryssland af C.R. Berch (egenhand.), pr 1735, M221. Kungliga Biblioteket, Handskriftsavdelningen, Stockholm
2. Brandel, Genserik, *Dagbok 1802-1825*, M227, Kungliga Biblioteket, Handskriftsavdelningen, Stockholm
3. Brockman, Nils Reinhold, "En resa genom östersjöprovinserna år 1754: Magister N. R. Broocmans reseanteckningar", *Svio-Estonica: Studier* 12, 1954, pp. 82-138.
4. Davis, Mark, *A Perambulating Paradox: British Travel Literature and the Image of Sweden c. 1770-1865*, Lund 2000.
5. Ehrström, Eric Gustaf, *Moskva brinner: En nyupptäckt svensk dagbok från 1812*, Stockholm 1984.
6. Hagen Schulz-Forberg, ed., *Unravelling. European Civilisation: Travel and Travel Writing*, Brussels 2005.
7. Hausswolff, Adelaide von, *En svensk flickas dagbok under krigsfångenskap i Ryssland 1808-1809*, Goteborg 1912.
8. Jangfeldt, Bengt, *Svenska vägar till S:t Petersburg: Kapitel ur historien om svenskarna vid Nevans stränder*, Trelleborg 1998.
9. Winberg, Anders, *Dag-bok hallen pa kongl. galär flottan åren 1789 och 1790 samt fångenskapen i Ryssland*, Stockholm 1967.